11. レセルピンおよびロリプラムのインビボ受容体結合に及ぼす影響

伊豫雅臣，福井　進
（精神保健研究所）

マウス線条体における〔^{3}H〕SCH23390の結合動態に及ぼすアミン枯渇と体温の影響をレセルピンとホスホジエステラーゼ阻害剤であるロリプラムを用いて調べた。レセルピンはマウスの体温を有意に低下させ，ロリプラムはその体温低下を回復させた。線条体〔^{3}H〕SCH23390結合の定量的指標として線条体・小脳放射能化を求めたが，この比は体温と有意に正の相関を示していた。

12. キンドリングモデルにおける G-protein の変化 第二報——長期持続性のてんかん原性に対する意義——

渡辺かおり，岩佐博人，菊池周一
（千大）
長谷川修司
（同高次機能制御研究センター 発達生理分野）

G蛋白質とてんかん原性との関連について，検討するため，扁桃核キンドリングモデルにおける〔^{3}H〕GTP binding assay を行った。最終発作後2週間の時点において，キンドリング群の両側海馬・大脳皮質で，対照群に認められた isoprenaline による Bmax 値増大効果の明かな消失が認められた。以上より，G蛋白質（特にGs）の機能の変化と長期持続性のてんかん原性獲得とが密接な関連を持つことが予想された。

13. Bartter 症候群を疑わす神経性食思不振症の1例

高木　実，高木　繁
（ダイヤビルクリニック）
稲垣正司
（国立循環器病センター）

慢性腎不全の既住を有する21才の女性が神経性食思不振症とともに pseudo-Bartter 症候群と診断された1例である。また一方，この症例は，神経性食思不振症発症以前からそのすべてに，複数の精神科医がかかわり合いを持っていたという点でも特異な症例である。

14. 5-FU 系の抗癌剤である tegafur および carmofur により精神神経症状を呈した2症例

池田智昭，浜屋達郎，岡田真一
山内直人，児玉和宏，佐藤甫夫
（千大）
小松隆行，北野邦孝（松戸市立）

tegatur 脳症では投薬2週間後よりせん妄状態と不安定歩行を呈し，脳波のみに異常を認めた。一方，carmofur 白質脳症では投薬1カ月後より不安定歩行が始まり，記銘力障害も出現した。投薬中止後も無言無動様状態にまで進行し回復は遅れた。検査異常の出現は遅れ，脳波の徐波化と，画像上前頭葉優位に白質に病変を認めた。臨床症状と検査所見とを比較し，作用発現機序について考察した。

15. 精神症状の変化に伴って脳血流所見が変化したループス精神病の1例

渡辺基樹，児玉和宏　（千大）
日野俊明　（北深谷病院）

ループス精神病の患者に SPECT を施行したところ，精神症状が寛解状態では前頭葉血流の軽度低下，躁状態では前頭葉血流の改善，うつ状態では前頭葉血流の著明な低下を認めた。

16. 面接相談と電話相談の違い ——児童・思春期の場合——

矢野　徹，若菜　坦
（千葉県精神保健センター）

平成3年4月から12月までに当センターへの来所者と電話相談の内20歳未満の症例について調べ比較検討した。新患53例，再来67例，電話相談は300件で，うち本人からのものは50件であった。来所者は，てんかん，精神分裂病，登校拒否，神経症など精神疾患群に集中しているが，電話相談の方は相談内容が多岐にわたり，電話の持つ匿名性や経済的，時間的な手軽さを反映しており，来所相談・診療とは違った役割を果たしていると考えられる。